

松本市里山辺

薄町・石上・鎌田遺跡

— 県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査概報 —

1991

松本市教育委員会

例言

1. 本書は平成元年8月19日から12月13日にかけて行われた松本市里山辺に所在する薄町遺跡・石上遺跡・鎌田遺跡の発掘調査概報である。
2. 本調査は平成元年度泉谷ほ場整備事業山辺地区に伴う緊急発掘調査であり、松本市が長野県松本地方事務所の委託を受け、松本市教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した実測図類の縮尺は以下の通り。
住居址 1 : 80 土坑 1 : 60 土器 1 : 4
4. 本書の執筆は、縄文時代の石器・石製品について関沢嗣、そのほかは龜井雅尚が行った。
5. 炭化物・炭化材の鑑定については森義直、縄文土器は島田哲男、白磁は原明芳の各氏からご教示を頂いた。
6. 遺跡の写真撮影は宮崎洋一氏による。
7. 本調査の実施にあたり、薄川土地改良区、里川辺公民館、山辺歴史研究会、その他の地元の方々に御協力を頂いた。
8. 本調査に係る事務記録、作業日誌類、測量図面類、出土遺跡のすべては松本市教育委員会が保管している。

目次

遺跡の立地と環境	2
調査の成果	3
縄文時代の遺構と遺物	
概要	6
石上遺跡第21号住居址	7
土坑	8
土器、石器・石製品	9
弥生時代の遺構と遺物	
概要	10
鎌田遺跡第4号住居址	10
鎌田遺跡第3号住居址	11
弥生土器	12
古墳時代の遺構と遺物	
概要	13
鎌田遺跡第2号住居址	13
古墳時代の土器	15
平安時代の遺構と遺物	
概要	16
石上遺跡第1・2号住居址	16
石上遺跡第22号住居址	17
石上遺跡第23号住居址	18
各住居址出土遺物について	19
土器からみる時間差	22
土器の種類	23
木炭を敷いた墓	24
中・近世の遺構と遺物	
概要	26
鏡面・土坑・土器	26
銭貨	29
調査のまとめ	30
特論	
松本市内の弥生時代遺跡	12
竪穴住居址と墓	18

遺跡の立地と環境

薄町・石上・鎌田の3遺跡は長野県松本市大字里山辺から大字入山辺にかけて広がり、互いに隣接している。周辺の集落名は薄町、上金井である。地形的には山辺の谷を開析しながら西流する薄川が造る扇状地の扇中央部、右岸段丘にあたり、西に緩く傾斜する。調査前の地目は水田と畑、果樹園（リンゴ・ブドウ）でそれらの間を薄川の支流から取水した大堰の分流がくまなく通水し、よく開発されている。しかし耕土下は表面の様相とは異なり、薄川の洪水性の砂礫と砂質土が広範囲にわたって見られた。地点によっては20~30cmの深さで礫面に達する。ただし縄文時代以降の遺構はすべてこれらの層を切り込み、その形成がずっと古いことを窺わせる。遺構を被覆・破壊する洪水性堆積は、鎌田遺跡の北端で観察されたのみである。

薄川の流域には各時代の遺跡が多い。同じ立地では0.5km西方下流の針塚遺跡、岡左岸の林山腰遺跡、扇状地扇中央部に展開する右岸の廻の内・兎川寺・山田・下

原、左岸の千鶴頭北・富士電機工場・神田、扇端部に三才・筑摩・泉町の各遺跡が分布する。これらのはかで発掘調査によって内容が明らかになっているのは縄文中期初頭集落の林山腰、弥生前期再葬墓の針塚、弥生中期後半~平安集落の泉町、古墳後期~奈良集落の下原などで、縄文時代から古代に至るまで比較的安定した生活圏であったことを窺わせる。針塚・猫塚・大塚・市上など数基の古墳も点在し、薄川右岸ものは積石塚であったと伝えられる。発掘調査の行われた針塚古墳については5世紀代に遡ることが判明したが、他は6世紀以降の築造であろう。9世紀の初頭に上田から松本に移転したといわれる信濃国府の推定地説のひとつも里山辺地籍にある。今回の調査地の北西方にあたるが、今のところ発掘所見からの裏付けはまったくない。中近世に下ると、本遺跡の南方、薄川を挟んだ山頂に小笠原氏の居城、林城がそびえていた。



第1図 調査範囲 1:6250

調査の成果

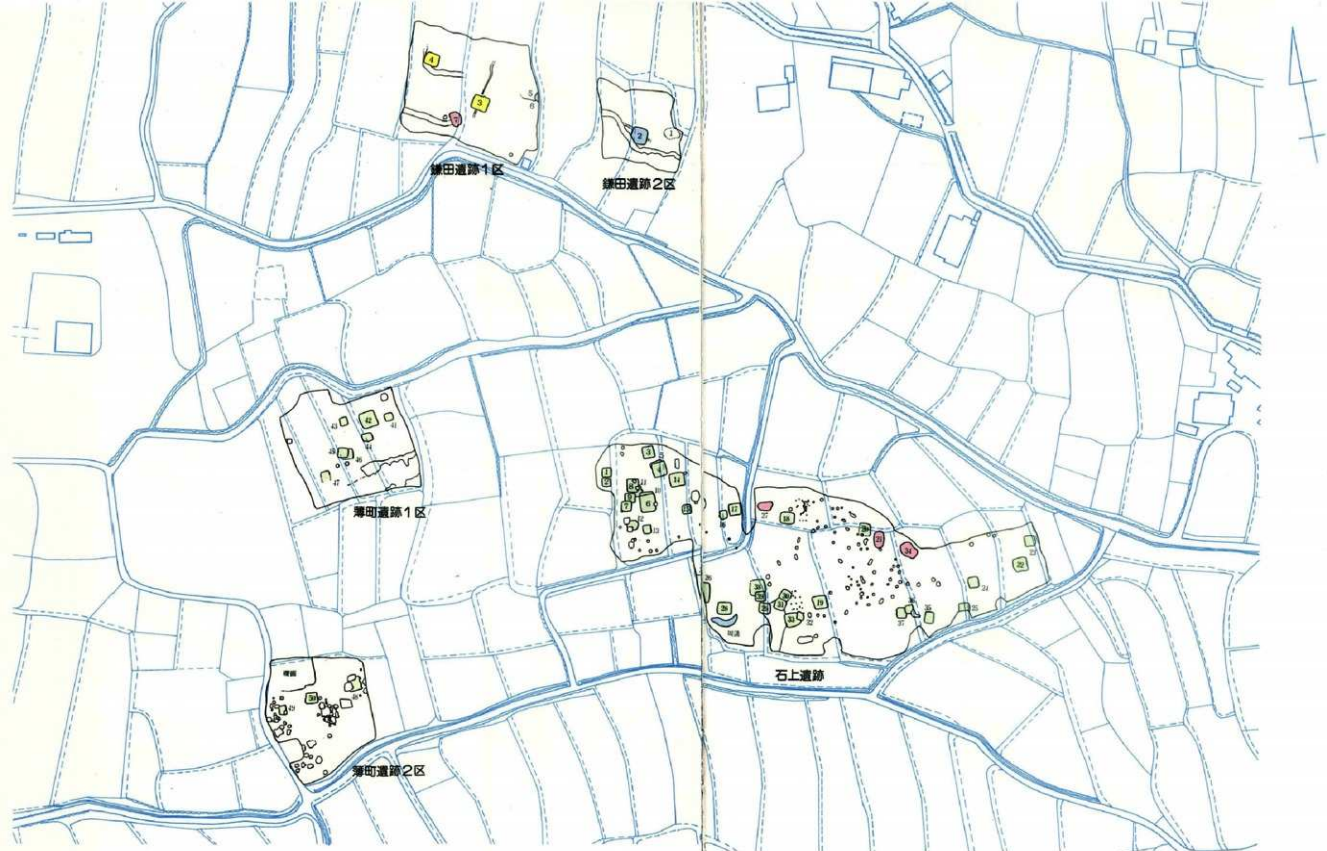
今回の調査では、薄町遺跡2地区計2791㎡、石上遺跡6312㎡、鎌田遺跡2地区計2517㎡の合計11620㎡を発掘調査した。時代は縄文時代前期末から中期初頭、弥生時代後期、古墳時代中・後期、平安時代、中世、近世という多岐にわたるもので、検出された遺構も竪穴住居址、土坑、ピット群、溝、墓、火葬墓、古墳、竪穴状遺構、集石など多様性に富む。遺物は、各時代の土器・陶磁器、石器、石製品、土製品、鉄器、鉄製品、銭貨と木炭、骨類があり、総量は整理用コンテナに約25箱で、調査面積にくらべて少ない。

特記すべき調査所見はいくつか挙げられる。第一は、石上遺跡から鎌田遺跡にかけて縄文時代前期末～中期初頭の小規模な集落址を検出したことで、3軒ほどの竪穴住居址と多数の土坑で構成されていた。第二は、鎌田遺跡で弥生時代後期と古墳時代中期の集落の一端を捉えたことで、松本平で資料が少ない時期でもあり貴重な発見といえる。第三は、石上遺跡から薄町遺跡にかけて平安時代前期と後期の集落址を把握したことであろう。薄川の段丘地帯には広範囲に該期の集落が展開していたことを窺わせる結果だ。第四は、石上遺跡での平安時代前期土塚墓の発見で、内容は本書に詳述するとおりだが、今回調査の最大の成果といえる。他にも、削平されてしまった古墳の周溝や近世の壇状の集石の検出も重要であろう。





遺物では、縄文時代竪穴住居址から出土した石製品(9頁)、古墳時代中期の竪穴住居址にまともって遺存した該期土器群(14・15頁)、平安時代土塚墓に埋納してあった一括遺物(26頁)が特筆に値する。このほか平安時代の竪穴住居址からは多数の土器が出土しており、良好な資料となった。

石上・鎌田・薄町遺跡遺構一覧表

遺跡	竪穴住居址	土坑	溝	火葬墓	ピット群	その他
石上	縄文3、平安33、不明3	縄文86、平安11	不明1	中世3	縄文?2	後期古墳1(周溝のみ)、平安土塚墓1
薄町1区	平安7	平安6	平安1			
薄町2区	平安3	中・近世60				近世の壇状断面1
鎌田1区	縄文1、弥生2、古墳1、不明1	縄文1		縄文?2 平安?1		
鎌田2区	古墳1、不明1			平安?2		
合計	縄文4、弥生2、古墳2、平安43、不明5 計56	縄文87、平安17 中・近世60	7	3	2	



第2図 薄町・石上・鎌田遺跡全体図

- | | | | |
|---|----------|--|-------------|
|  | 縄文時代の住居址 |  | 古墳時代の住居址と周溝 |
|  | 弥生時代の住居址 |  | 平安時代の住居址 |



縄文時代の遺構と遺物

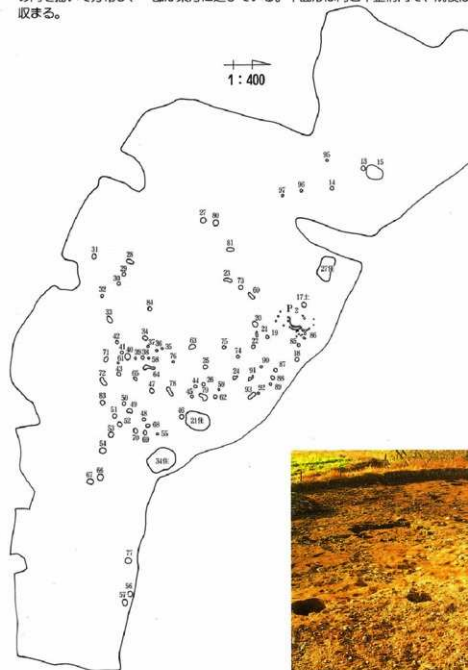
概要

この時期の遺構は、竪穴住居址4軒、土坑82基、ピット群1か所で、そのうち竪穴住居址1軒と土坑1個が鎌田遺跡1地区にある他は、すべて石上遺跡に属する。また遺構ではないが鎌田遺跡の1区と2区に計3か所ほど縄文時代晩期～弥生中期初頭とみられる土器片が集中して出土した地点があった。石上遺跡の33号住居址（平安時代）やピット群1の周辺からも中期中葉の土器片がいくつか出土しており、ピット群1はこの時期の遺構である可能性も残る。

竪穴住居址は石上遺跡の調査地北側に沿って3軒、鎌田遺跡1区の南西部に1軒が分布する。ピット群2は弧状の溝をともない、住居址の一種、あるいは削平された竪穴住居址の周溝とピットの痕跡と推定しているが確証はない。焼土などは見られなかった。土坑は石上遺跡の調査地中央部に、南西部を開口するように直径30mほどの円を描いて分布し、一部が東方に延びている。平面形は円と不整形円で、規模は径0.5～1.5mくらいの範囲に収まる。

遺物は土器・石器・石製品が見られる。土器は全形がわかるものは土坑出土の2点のみ（9頁）で他は破片だが、いずれも前期末から中期初頭の時期に属し、各遺構の時期もそこに求められる。石器には石鏃・石匙・石錐・石錘・打製石斧などの種類があるが少量で、遺構に伴うのは多くない。石製品は石上34号住居址出土のへら状の垂飾り1点のみである。

石上遺跡の縄文時代遺構は全体的に見て、数軒の竪穴住居と多数の土坑によって構成されている。縄文時代前期末から中期初頭にかけての小規模な集落という感じが強い。北側の未調査部分に延びるとしてもそれほど大幅なものではないと考える。



第3図 石上遺跡縄文時代遺構配置



石上遺跡中央部土坑群を北から望む。左奥は第37号住居址（平安）。

竪穴住居址

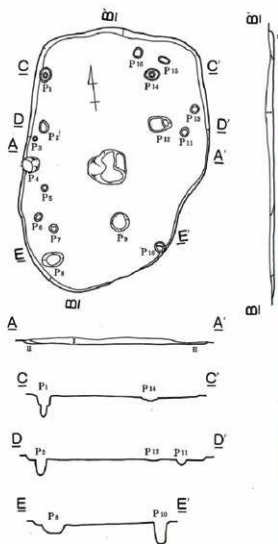
縄文時代の竪穴住居址には、石上遺跡21・27・34号住居址、鎌田遺跡7号住居址が該当する。時期は出土した土器からみて前期末～中期初頭にあたるが、石上遺跡27号は出土量が少なく断定できない。各住居址とも平面形は長径5～6mの不整形楕円を呈すが、主軸方向は一定しない。また炉址が存在したのは石上21号と鎌田7号の2軒のみで、それも僅かな焼土が認められたにすぎない。ピットの配列も不規則で、住居として認定するには問題なものもあるかもしれない。しかも石上遺跡の該期住居址分布域の上部には僅かではあるが小規模な洪水性の堆積が覆っており、そのため遺構としても不明瞭なものになっている。特に石上21・34号はピットの中にまで粗砂が充填していた。

遺物の出土は全体的に少ない。土器は全形を知り得るものはなく、石上21号、鎌田7号から若干のまとまった破片が出土したのみだ。石器・石製品は石上21号から石鏃・石匙、同34号から石鏃・玉べら（いずれも9頁写真）が出土した程度である。

石上遺跡第21号住居址

石上遺跡調査地の中央部東、環状をなす土坑群の東部に位置する。平面形は不整形な楕円あるいは隅丸長方形で、長径5.7m、短径3.9mの規模をもつ。検出面からの掘り込みは8～12cmと浅く、壁の傾斜も緩やかである。床面は概して平坦だが、中央部に僅かに硬さを感じるのみの不明瞭なものであった。炉は床面中央の大きな窪みの一部に僅かに焼土が見られたので、これを該当させたい。柱穴は壁際に巡るピット1・2・4・8・10・11・15などを対応させたいが、配置が不揃いですっきりしない。

本址の覆土中には細片の炭化材と焼土が広範囲に含まれており、部分的には小形の炭化材の遺存も見られた。これをもって焼失住居と認定することは早計だが、特異な発見状況を考慮する必要がある。



- I : 暗褐色土 (焼土微量、pH5.5～1m大のローム層少量、炭化物・白色砂粒多量混入)
 II : 褐色土 (炭化物・焼土微量、pH2～10m大の暗褐色土塊少量混入)
 III : 黒褐色土 (pH5～10m大のローム層少量、白色砂粒多量混入)

第4図 石上遺跡第21号住居址



第21号住居址を西から望む。



同上、南から。手前はほとんど壁が残っていない。

土坑

石上遺跡で81基、鎌田遺跡1区で1基が検出された。石上遺跡では調査地中央部に直径約30mの環状にまとまって分布し、そこから東に延びていく状況が窺える。

土坑の平面形は円形と楕円・不整形円に大別され、円形のものが多い。断面形も平面形にほぼ対応して、平面形が円形の場合は壁の傾斜が垂直か、かなり急で底に平坦面を持つ。しかも深いものが多く30~60cmが一般的で、稀に1mを超える場合があった。これに対し楕円系には壁の傾斜が緩やかでそのまま船底状やすり鉢状の底部に続き、深さも50cm止りとなる。一括土器を出土したのは後者である。埋没状況はほとんどが自然堆積を示した。



第18号土坑 円形、壁が垂直な土坑。底部に長方形の縁が横たわる。



第68号 円形の浅い土坑。内部に径20cm大の縁が詰まっている。

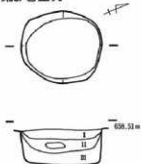


第21号土坑 土坑半掘時の土器(右頁上)出土状態。



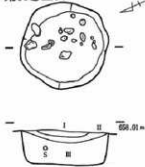
第72号土坑 壁にもたれ掛かるように出土した土器(右頁下)。

第57号土坑



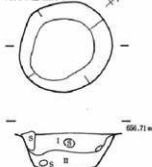
- I: 暗褐色土 (炭化物少量、 ϕ 0.1m大の礫少量混入)
- II: 暗褐色土 (ϕ 0.5~1m大の黄褐色土塊少量、 ϕ 20cm大の礫少量混入)
- III: 暗褐色土 (ϕ 0.5~2m大の黄褐色土塊少量混入)

第66号土坑



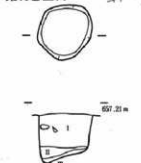
- I: 黄色土 (ϕ 1~2m大の暗褐色土塊少量混入)
- II: 暗褐色土 (ϕ 0.5~1m大の黄褐色土塊少量混入)
- III: 暗褐色土 (炭化物・焼土少量、 ϕ 1~10cm大の礫少量混入、II層より層iv)

第80号土坑



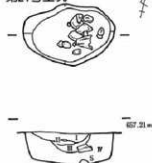
- I: 暗褐色土 (ϕ 1~2m大の褐色土塊少量、 ϕ 2~30cm大の礫混入)
- II: 暗褐色土 (ϕ 0.5~2m大の褐色土塊少量、 ϕ 2~15cm大の礫混入)

第19号土坑



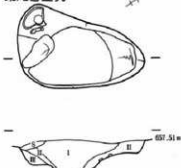
- I: 暗褐色土 (ϕ 0.5~1m大の礫・炭化物少量混入)
- II: 暗褐色土 (ϕ 0.5~1m大の礫少量混入、砂質)
- III: 黄褐色土 (黄色土・炭化物少量混入、砂質)

第21号土坑



- I: 暗褐色土 (ϕ 0.5~1m大の礫・炭化物少量混入)
- II: 焼土 (ϕ 0.5m大の礫少量、炭化物少量混入)
- III: 暗褐色土 (炭化物少量混入、I層より中層iv)
- IV: 黄褐色土 (ϕ 0.5~1m大の礫少量混入)

第72号土坑



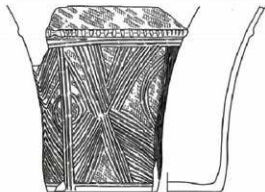
- I: 暗褐色土 (ϕ 2~4m大の礫少量混入、層iv)
- II: 黄褐色土 (ϕ 5~10m大の礫少量混入)
- III: 黄褐色土

第5図 第19・21・57・66・72・80号土坑

土器

竪穴住居址、土坑と検出面および後世の遺構内から出土しているが量は少なく、全形が判明するのは石上21号土坑と78号土坑出土品の2点にすぎない。ここではこの2点を実測図と写真で、また参考資料として石上遺跡調査地西部出土品を拓影で示した。

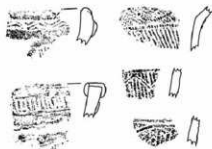
21号土坑出土品は口縁部を欠く深鉢で、上部の隆帯以外は全面に縄文を転がした後、中細の半截竹管による平行沈線で隆帯以下に大きな縦の区面を作り、そのなかに同一工具により半円やX字状の模様を描く。78号出土品の施紋はすべて半截竹管の平行沈線で、器形に対応させた横の区面帯を意識して斜線や鋸歯紋を描いた後に横線を引き区面を明瞭にしている。拓影と共に前期終末から中期初頭に比定される土器と考える。



残存高20.0cm、底径11.8cm、最大径20.6cm。



全形がわかる。器高23.8cm、底径10.4cm、口径20.0cm。



第6図 縄文土器実測図

石器・石製品

石鏃はいずれも凹基無茎鏃で、石材には黒曜石とチャートが利用されている。石匙は横形で外湾する両面加工の刃部をもっている。石鏝は一般に漁網鏝と考えられており、自然態を加工して紐掛け用の袂りが作り出されている。玉ペラは蛇文岩製の靴べら状を呈する石製品で、穴をもつことから袂身具と考えられる。



第7図 石製品(玉ペラ)実測図



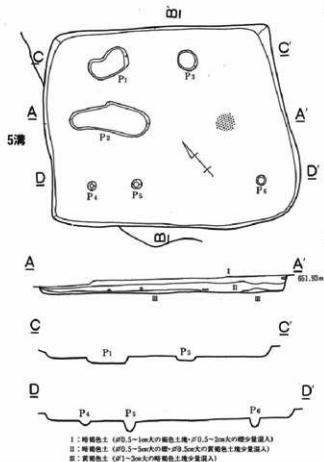
左側4点が石鏃、中央上が石鏝、同下が石匙、右端が玉ペラ。実寸は左下隅の石鏃が長さ3.5cm。

弥生時代の遺構と遺物

概要

遺構は、鎌田遺跡1区において2軒の竪穴住居址が発見されたのみで、遺物もそれらに伴うものと周辺の検出面から若干が出土したにすぎない。今回の3遺跡の調査で確認された時期のなかでは最も貧弱な内容といえる。しかし鎌田遺跡に限ってみれば、他で主体となった平安時代以降はまったく見られず、次に述べる古墳時代とともに、この弥生時代が中核になっていることは疑いがない。

この弥生時代の遺構は検出に難渋を極めた。そもそも鎌田1区は黒褐色土が厚く、その面から遺構が掘り込まれていたので、遺物は出土するガランが窺えないという事態が続き、最終的には各所に試掘溝を入れて確認した。2軒の住居址は共に平面形が隅丸の長方形を呈し、主軸方向も揃って、同時存在の可能性が大きい。出土土器から後期後半に属すると推定する。



第8図 鎌田遺跡第4号住居址

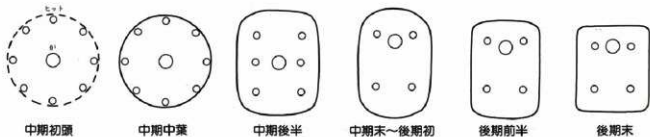
鎌田遺跡第4号住居址

鎌田1区北部に位置し、5号溝を切る。平面形は長辺4.8~5.3m、短辺4.2mのやや歪んだ隅丸長方形を呈し、主軸方向はS-50°-Eを指す。壁高は35~40cmで垂直に近い傾斜をもつ。床面は南西方向に緩傾するがほぼ平坦で、中央を中心に比較的堅固な部分が広がる。施設はピットが8個、炉が1か所確認された。炉は中軸線上の奥壁よりにある直径30cmほどの地床炉、ピットは規模と配置が不揃いで主柱穴の比定が難しい。

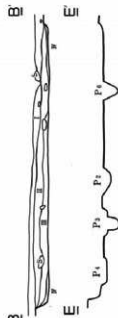
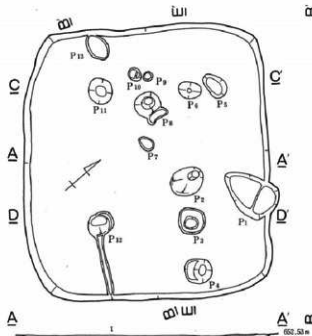
覆土は自然堆積の状態を呈し、遺物の出土は小片の土器が散在していたのみであった。



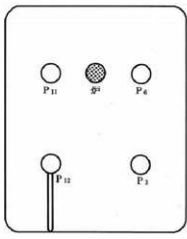
北西奥壁側から撮影。本址外周部の土の段差は、検出用のトレンチの跡。



第9図 松本平における弥生時代住居の実遷模式図



1: 柱礎石 (0.5-1.2mの幅、土色、白灰土、0.1-1.2mの厚さ)
 2: 柱礎石 (0.5-1.2mの幅、土色、白灰土、0.1-1.2mの厚さ)
 3: 柱礎石 (0.5-1.2mの幅、土色、白灰土、0.1-1.2mの厚さ)
 4: 柱礎石 (0.5-1.2mの幅、土色、白灰土、0.1-1.2mの厚さ)
 5: 柱礎石 (0.5-1.2mの幅、土色、白灰土、0.1-1.2mの厚さ)
 6: 柱礎石 (0.5-1.2mの幅、土色、白灰土、0.1-1.2mの厚さ)



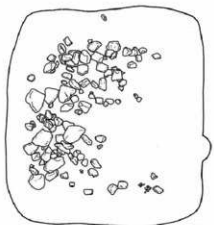
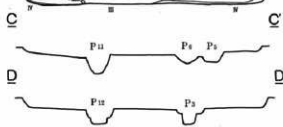
柱穴配置模式

第10図 鎌田遺跡第3号住居址

鎌田遺跡第3号住居址

D 鎌田1区中央部に位置し、上部を4溝が横切る。平面形は長辺5.8m、短辺5.2mの隅丸長方形を呈し、主軸方向N-50°-Wを指す。壁の傾きは急で、深さは40cm前後を測る。床面は平坦で、全面的に堅い良好なものであった。炉は奥壁よりのビット8に焼土が見られ、これを充てる。柱穴は長方形配列のビット3・6・11・12を想定するのが位置や規模からみてもふさわしい。ビット12から南壁に向かって深さ10cm以下の細い溝が走っているが、用途は類型との比較を待たなければわからない。ただし明らかに本址に伴う施設であった。

本址の埋没は土層から見ると自然堆積の状況を示すが、南部から西部にかけて5~40cmほどもある礫が覆土下層に集まっており、礫に対する人為的な集積が行われていることは間違いない。遺物は土器がビット内と床面から少量出土したのみである。



住居址内の礫

本址の他にも今回の調査では、異なった時代の竪穴住居址内から自然に流入したとは考えられない量の礫が出土することがあった。この礫群の解釈は、住居内では明らかに用いていたが、住居の上層構造に関わるもの、住居を廃絶したときのおまつり、あるいは廃絶した竪穴を利用する礫の集積や廃棄などが考えられる。



南東入り口側から撮影。遺構内に露出する礫は地山に含まれるもの。

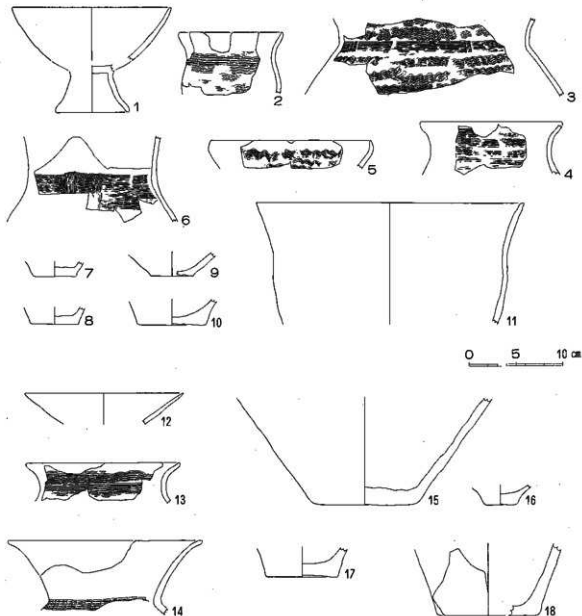
弥生土器

住居址と周辺検出面から少量が出土した。ここに示すのは2軒の住居址で図化可能なものすべてである。1～11が鎌田3号、12～18が同4号出土である。

器種は、高杯(1・12)、甕(2～4・7・8・10・11・13・17・18)、壺(5・6・9・14～16)の3種類。甕は口縁端部が僅かに内差し楕波状紋で飾られるが、2と3の頸部には簾状紋が巡る。壺は6の頸部に丁字紋、14には等間隔止の簾状紋が巡り、様相を異にする。また14頸部の明らかな屈曲は、4号の新しさの要素かもしれない。1の高杯は脚部内面を除き赤彩される。

松本市内の弥生時代遺跡

松本市内で弥生時代の竪穴住居址の発見された遺跡は中・後期を併せても今回調査の段階で10例に満たない。しかもそれらは奈良井川や田川を作る湿地や湧水帯に近接して立地し、当地では水田可耕地と集落立地は重要な連関にあったといえる。特に中期では泉田遺跡や宮沢本村遺跡など特定の遺跡に住居が集中し大きな集落をなす傾向が強い。技術的な限界から生産地の選択が非常に限定されていたためであろう。それでも後期になると小規模な集落が増えてくるようで、本例もそのひとつである。そこからは技術と道具の向上により主要河川から隔たった、ごく限られた水田遺地を求めて生活圏を拡散させていく姿を読み取ることができる。これが松本平の原始から古代に向けての第一開発期と捉えることができよう。しかしその後、古墳時代後期後半まで大きな停滞が続く。遺跡の分布や数の増加がまったくないのだ。本例において古墳時代中期の住居と分布が重なるのはその証拠の一つである。



第11図 鎌田遺跡第3・4号住居址出土弥生土器

古墳時代の遺構と遺物

概要

この時期に属する遺構は、鎌田遺跡で1区と2区からそれぞれ1軒の中期の竪穴住居址、石上遺跡で後期古墳が削平され周溝のみが残ったもの1基が該当する。また薄町遺跡2区で同後期の土器が少量だがまとまって出土した地点があり、中近世の土坑に破壊されてしまったが、該期の遺構であった可能性がある。

竪穴住居址は鎌田2号と6号で、6号は大半が発掘区域外にかり調査できた部分は少ないが、2号は良好な資料の出土をみた。古墳の周溝は石上遺跡中央部南西にあり、弧状に半周するだけだったので検出時は単なる溝と捉えたが、下部から土師器と須恵器の一括品が出土したため古墳周溝と認識するに至った。周溝に囲まれた内部には他の検出面と同レベルで平安時代中期の竪穴住居址が掘り込まれており、この古墳は平安時代には既に煙滅していたことがわかる。



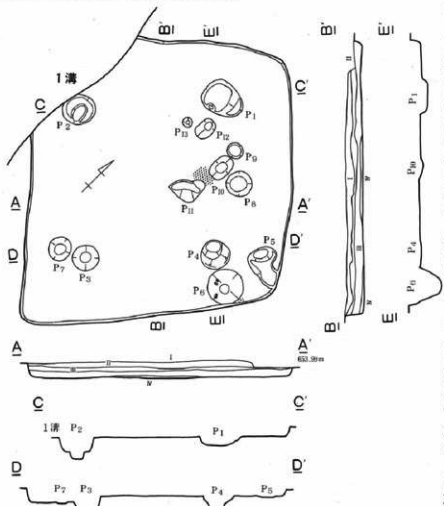
南東から。左手前は後世の溝に切られる。

鎌田遺跡第2号住居址

鎌田2区中央部にあり、西隅を1号溝に切られる。平面形は主軸方向5.6m、直行方向5.2~6.0mのやや台形のような隅丸正方形を呈し、主軸はN-45°-Eにとる。壁は垂直に近い傾斜で30~40cmの高さを有する。床面は地山の暗褐色土をそのまま用いているが、平坦で非常に堅緻なものであった。住居内の施設では炉とピットが検出されている。ピットは大小あわせて13個が確認されたが、主柱穴は規模や配置からみてピット1~4を想定する。ピット6は貯蔵穴のようなものであろう。炉は地床炉でピット1・4の中間にある焼土が相当する。炉の周辺に集中するピットの意味はわからない。

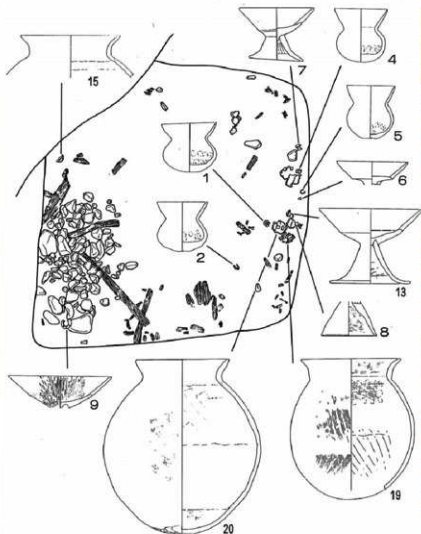
本址一帯の土層は粘質の暗褐色土で検出作業にあたっては非常に困難が伴ったが、本址覆土の上層が僅かに灰色を呈していたためかろうじて識別することができた。覆土の埋没は自然堆積を示すが、後述のように下層には炭化材があり、南隅には礫が集められていた。発掘状況に一考を要する点である。

本址は西隅を僅かに失っていたが、他は遺存状態がよく、住居内施設もしっかりと揃っており、松本市におけるこの時期を代表する竪穴住居址のひとつといえる。



- I: 暗褐色土(γ0.3~0.5m大の褐色砂質土多量混入、相貫層中に鉄分塊・灰状集積あり)
- II: 灰褐色土(γ0.5m大の褐色砂質土較少量、γ0.1~0.3m大の(白色礫多量混入)
- III: 灰褐色土(白色礫・灰土礫粒・灰化物混入、腐植質)
- IV: 暗褐色土(黄褐色・多量褐色砂質混入)

第12図 鎌田遺跡第2号住居址



第13図 鎌田遺跡第2号住居址遺物出土状態

遺物の出土状況

土器と炭化材、礫が特異な状態で出土している。土器は北東壁中央部に沿って一括品や大破片が床上に数多く残り、10点を図示できたが細片になって復元不可能の糺がもう2個体ほどある。他の部分から出土した土器には全形がわかるものはない。炭化材は住居址内の各所に散乱していたが、明らかに建築部材と見られる太いものは南部に集中している。これらの炭化材はいずれも覆土の最下層に含まれていた。礫は南隅から南西壁直下の一帯の中層から下層に集積されており、径5~40cm近い大きなものまで含まれていた。この礫は自然の営力によってもたらされたものとは到底考えられない。

炭化材の出土や土器の遺存の状態からみて本址がいわゆる焼失住居の一種であることは間違いないが、不慮の事故かどうかは決めかねる。また南部の礫の集積は焼失の後である可能性がある。

炭化材について

樹種はコナラが多くクリ、アキニレも少々。クリ材の薄板に混じってベンガラが僅かに検出された。スキの茎も確認された。



壁際から出土した壘と小形丸底甕。



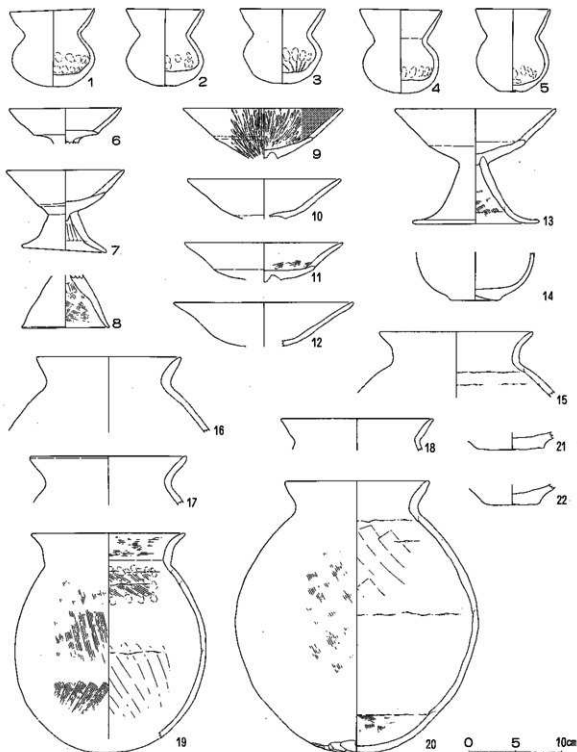
壁際の炭化材と投げ込まれた礫。



本址南隅に集められた大小の礫群。



手前左側に小形丸底甕が5個、右側に高環が坏部・脚部のみを合わせて5個、壘に糺が2個。高環のひとは内黒。



古墳時代の土器 (写真左)

第14図 鎌田遺跡等2号住居址出土土器

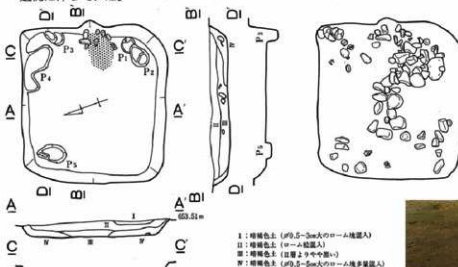
鎌田2号からの土器は20点が図化できた。小型丸底甕(1~5)、高坏(6~13)、小形の壺(14)、甕(15~20)、壺(底部のみ: 21・22)の5器種である。小型丸底甕は規格が統一されているが、調整は雑で器形が歪み外面にミガキは施されない。高坏は坏部の径からみて2種の寸法がありそうだ。また脚部は外反するもの(7・13)と内弯気味のもの(8)の2形態が存在する。甕は全形のわかるものは1点しかないが、「く」の字に屈曲する頸部とやや卵形の胴部、ケズリによって丸くした底部に最大の特徴がある。壺は底部を2点提示できただけだが、丸底の壺とは簡単に分離できる。他遺跡の例からすると退化した二重口縁(有段口縁)を持つ。これらの土器群は松本市内では白神場遺跡12号住居出土土器に次ぐ位置を占める非常に良好な一括遺物で、5世紀前半に比定される。

平安時代の遺構と遺物

概要

平安時代が今回調査の主体である。遺構は竪穴住居址43軒、土坑17基、土壇壘1基で、竪穴住居址を中心とする集落址といえる。竪穴住居址の分布は石上遺跡全域から薄町遺跡1区を中心に拡がり、一部は薄町遺跡2区にまで及んでいた。そのなかでも石上遺跡西部に集中が見られる。ただし出土土器の所見からするとすべてが一連のものではなく、9世紀後半から10世紀前半にかけてと12世紀の二層に分かれる。

遺物は土器・陶磁器では土師器・須恵器・灰釉陶器に加えて僅かだが緑釉陶器や白磁が出土しており、鉄器も遺構に伴っていた。



第15図 石上遺跡第1号住居址

石上遺跡第1号住居址

石上遺跡調査地西端に位置し、2号住居址に隣接。3.4×3.2mの隅丸方形を呈し、主軸をS-70°-Eにとる。壁はやや緩やかで壁高30~40cm。床面は平坦軟弱で、地山の黄褐色砂質土をそのまま用いる。カマドは東壁中央に設けられた石芯カマドで石材が残る。ピットは浅いものが5個あるが、柱穴とはならない。9世紀末~10世紀初頭。

遺物と陳

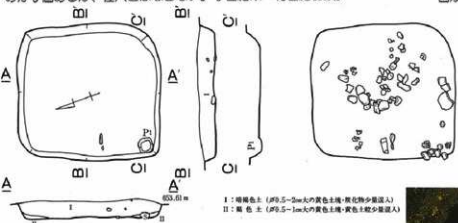
遺物は土器が主で覆土中層から床面にかけて点在した。完形に近いものもあつたが意図的にまとめられた出土状態を示していない。陳は中央部から東部の中層に集中する。径5~40cmの垂円礫で、本址埋没あるいは埋め戻し時に意図的に集められたものと判断される。



西からみた1号住居。右隣の2号は未掘。

遺物と陳

遺物は土器が中心で各所から散発的に出土するが、カマドと南西隅にいくつかがまとまる。陳は単層の覆土最下部中央に集中し、施設か部材とされていたが、本址発掘時に集められたと推定される。



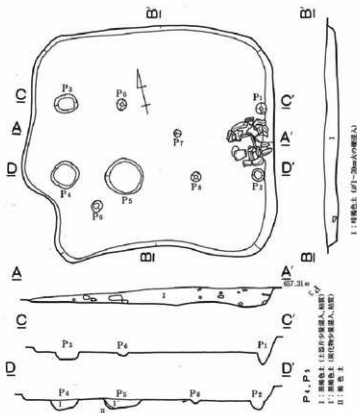
第16図 石上遺跡第2号住居址

石上遺跡第2号住居址

石上遺跡調査地西端、1号住居址に隣接する。平面形は一辺3mの隅丸方形で、主軸方向はN-70°-W。壁高は30~40cm、傾斜はやや緩やかで軟弱な床に続く。カマドは西壁中央に僅かに芯の石材が残る、ピットは南西隅に1個検出されたのみである。土器の編年観から、隣の1号より本址の先行が確認される。9世紀後半。

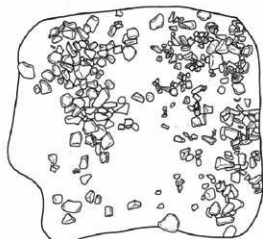
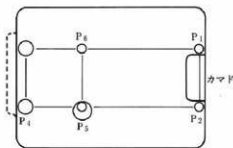


東から見る2号住居。右隣は1号。



石上遺跡第22号住居址

石上遺跡調査地東端部に位置し、本址北東5mには23号住居址がある。長辺4.8~5.2m、短辺4.7mの隅丸長方形を呈すが西壁中央に不規則な張り出しがある。地形の傾斜のため東壁は40cm近い掘り込みを有すが、西は5~10cmと浅い。地山が酸質のため、床面は細かい起伏に富むが概して平坦、壁面である。東壁中央のカマドは石組みで石材の多くが良好に遺存した。ピットは9個、柱穴に比定できるのは1~4または1・2・5・6である。9世紀末。



第17図 石上遺跡第22号住居址

住居址内の穢

本址全域の覆土中・下層に多量の穢が存在し、遺物はその間から出土するという感じであった。穢は径5~30cmの垂角穢で、住居の上屋構造に関わるものや何らかの施設というよりは本址廃棄の埋め戻しの際に投入されたと考えている。

柱穴配置について

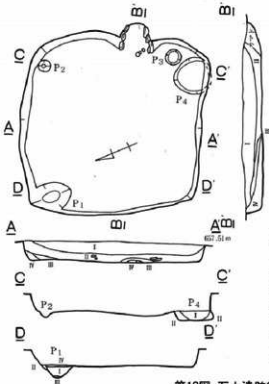
カマド両脇のピット1・2と中央西寄りのピット5・6の長方形配列が、さらに西のピット3・4まで延びるかが問題となる。前者ではピットが不揃い、後者では長すぎる。



掘り上った22号住居。露出している穢は地山に含まれるもの。西から撮影。

22号住居覆土中の穢出土状態。地山にも穢は多いが、自然に入りこんだものではない。

22号住居カマド。袖の芯の石材が立ったままで残る。内部の穢は天井部の材か?



- I : 黒褐色土(柱穴内)の黄褐色土(1-4m大の埋少量、(1色砂粒多量混入))
 II : 黒褐色土(柱穴内)の黄褐色土(1-20m大の埋少量、(1色砂粒中量混入))
 III : 黒褐色土(1-5m大の黄褐色土埋少量混入)
 IV : 黒褐色土(1-20m大の黄褐色土埋少量混入)
- P4**
 I : 黒褐色土(1-0.5-1.5m大の黄褐色土埋少量混入、粘質)
 II : 黒褐色土(1-0.5-1.5m大の黄褐色土埋少量混入、粘質)
- P1**
 I : 黒褐色土(1-0.5m大の黄褐色土埋少量混入)
 II : 黄褐色土
 III : 粘質黄褐色土
 IV : 黒褐色土(1-0.5m大の黄褐色土埋少量混入)



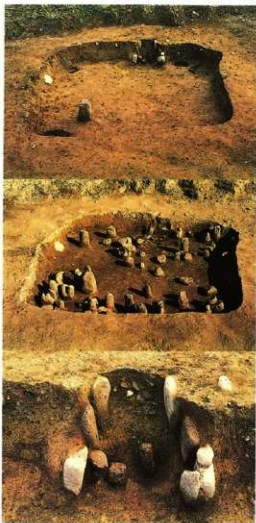
石上遺跡第23号住居址
 調査地最西端に位置する。平面形は一辺約4mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、主軸はS-70°-Eを指す。壁の傾斜は急で、掘り込みは40cmを測る。床面は礫質の地山直床で、細かい起伏に富み、南西にむかって緩傾する。カマドは東壁中央やや南寄りにあり、壁外へ張り出す。芯の石材が原位置に残って良好な遺存状態を示した。ピットは大小4個が検出されたが、柱穴に比定できるものはない。時期は土器からみて9世紀後半。

第18図 石上遺跡第23号住居址

西からみた23号住居掘り上り状態。左手前の土柱は測量用のもので本址とは無関係。

23号住居覆土中の検出土状態。大小の礫が点在している。しかし自然に入り込んだものか疑問。

23号住居のカマド。袖石の石材と粘土が残り、左側の袖には被熱痕も窺える。中央の立石は支脚。



遺物と壁

土器を中心とする多数の遺物が出土した。出土地点は住居内各所にわたるが、カマド内と周辺からが多い。この性格は日常生活時の破損品の集積とは考えられない。やはり住居廃絶に関連した遺棄・廃棄あるいは祭祀を想定したい。

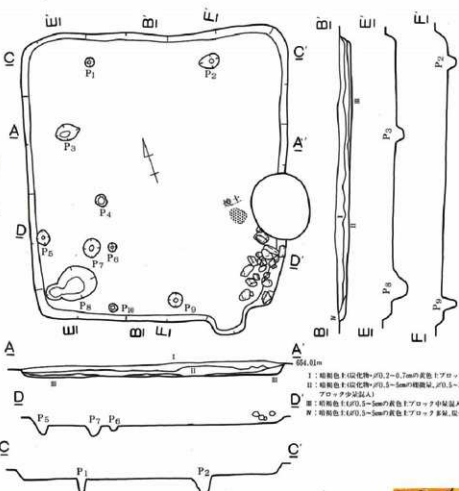
礫は5~40cmの歪各礫が散在するが、西壁際とカマド前方が多い。分布や大きさからみて自然に流入したものとは認められない。しかし住居内の施設や上屋に敷せられていたものとの積極的な証明もできない。包含土層から見ると自然堆積の第II層で床面に近く、人為的なものなら住居廃絶時に連続して集積された可能性が大きい。

竪穴住居址と壁

ここまで見てきたように今回調査では弥生時代の鎌田3号、古墳時代の鎌田2号、平安時代の石上1・2・22・23号のいずれの竪穴住居址にも覆土中に礫群が見られた。この状況は他の遺跡でもしばしばあるがいったい何を示すのだろうか。しかも各事例はそれぞれに礫のあり方が異なっている。理由はいくつか考えられるが、①住居の上屋の一部として使われていた、②住居の施設として使われていた、③住居を廃絶する際の祭祀・呪い、④廃絶後の住居の竪穴への礫の貯蔵、⑤あるいは同様の竪穴の壁や土捨て場としての再利用または埋め戻し、などが説得力があろう。本遺跡では⑤または③が最も適合すると考える。

石上遺跡第6号住居址

調査地西部の住居址が集中するなかにより、4号土坑に切られ10号住居址を切る。従って11号住居→10号住居→6号住居→4号土坑の順に新しくなる。長さ6.1m、短辺5.4～5.7mのやや歪んだ腰丸長方形を呈す。主軸方向はS-70°-Eである。壁の傾斜は45度に近く、検出面からの掘り込みの深さは20～30cmを測る。床面は地山の暗黄褐色砂質土をそのまま用いており、平坦だが軟弱で西に緩傾する。カマドは東壁南端の襖群をその残骸とみたが焼土は検出されていない。むしろ焼土はそこから60cmほど北にあり、4号土坑によってカマド本体は破壊されているのかもしれない。ピットは10個確認され、位置からみてピット1・2・9・10が柱穴に該当すると考える。本址は石上遺跡のなかでは最大規模の住居址であった。12世紀初頭。



- I: 暗褐色土(炭化物)P1, 2-0.7mの褐色土(アロク)検出区
- II: 暗褐色土(炭化物)P1, 5-5.5mの褐色土(アロク)検出区
- III: 暗褐色土(P1, 5-5.5mの褐色土(アロク)中層区)
- IV: 暗褐色土(P1, 5-5.5mの褐色土(アロク)多量区, 炭化物検出区)

第19図 石上遺跡第6号住居址

遺物出土

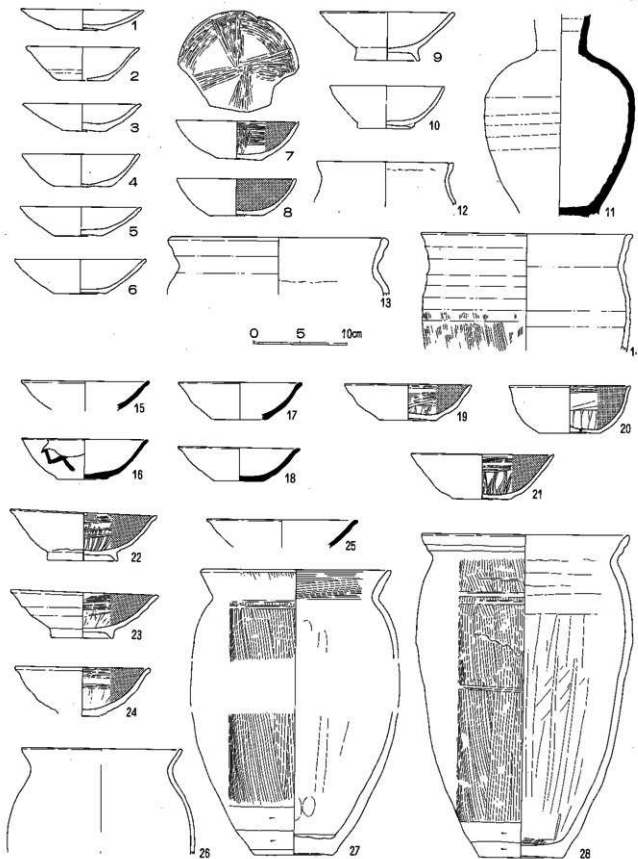
遺物は土器、鉄器、砥石が出土している。これらのほとんどは床面が覆土下層の出土であるが、意図的にまとめられたり配置されたりした痕跡はまったくなく、大小の破片となって点在した。強いて挙げれば北東部1/4の範囲から環類の出土が多かった。遺物のほかに5～25cmの襖が点在していたが、カマド推定地にまともりがあっただけで他は単独であった。本址の覆土は細かい自然堆積状を呈しており、遺物については一部に廃棄的狀況も想定しうるが、それ以上のはなからう。

各住居址出土土器について

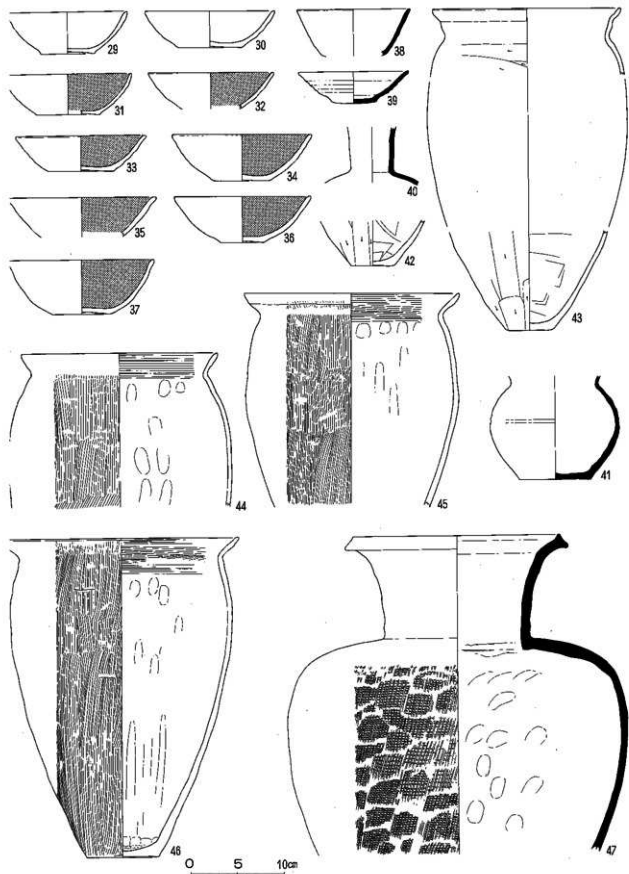
遺構を紹介した石上1・2・6・22・23号住居址の出土土器を可能な限り図示した。1号(1～14)、2号(15～28)、6号(64～87)、22号(48～63)、23号(29～47)の計87個体である。種別は土師器、内黒土師器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器で、器種は杯、碗、皿、段皿、鉢、甕、小形甕、大甕、長頸壺、短頸壺などがみられる。主な器種を概観すると、杯は土師器(1～6・29・30・49)と内黒土師器(7・8・19～21・31～37・48)、須恵器(38・39)、軟質須恵器(15～18・51・52)の種別で構成され、いずれも口口調整で底面に回転糸切り痕を残す。内黒土師器のものは内面にミガキが施される。6号出土の小形の皿状のもの(64～81)も土師器の杯に含める。碗は土師器(9・10)、内黒土師器(22～24・50)、灰釉陶器(25・55)、6号出土の土師器の小形のもの(83・84)と黒色土師器(85)で構成され、杯と同様口口調整、内黒のものは内面ミガキである。皿・段皿は灰釉陶器のみ(53・54・56)、土師器の壺は外面にハケメを持つもの(14・27・28・44～46)と器内が薄く外面にケズリ痕を明瞭に残すものの2種があり、前者には上半に口口調整が施されるものもある。杯・碗類の形態が6号出土品と他でまったく異なるのは時期差に起因する。



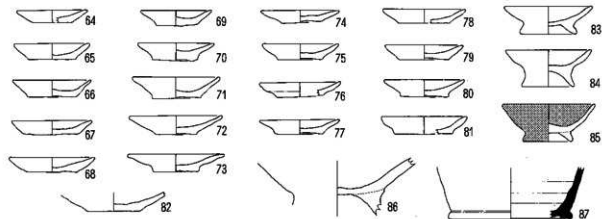
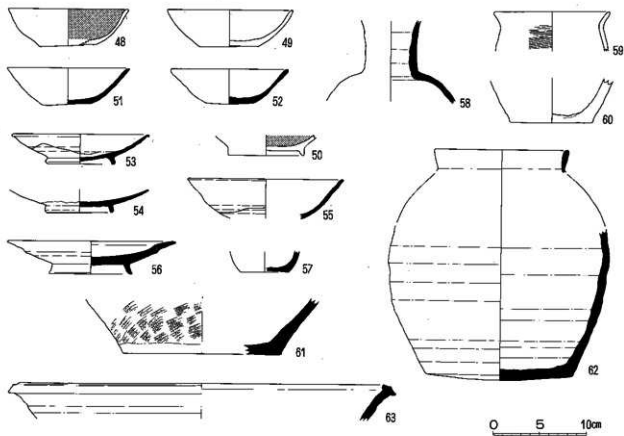
6号住居を西から撮影。奥壁の出っ張り土坑。



第20图 石上遺跡第1・2号住居址出土土器



第21図 石上遺跡第23号住居址出土土器



第22図 石上遺跡第22・6号住居址出土土器

土器から見る時間差

ここに示した各住居址出土の土器群は6号からのものを除き、かなり似てはいるが微妙な点で違いがあり、そこに僅かな時間差が存在することを窺わせる。特定の器種の存否と形態、技法の変化でその差を追ってみたい。

最も古い段階には23号の土器群を置くことができる。須恵器の環と土師器の外面ケズリの鬘の存在がその理由である。内黒土師器の椀が見当たらないことも重要だ。次には2号と22号の土器群がくる。軟質須恵器の環と内黒土師器の椀や灰釉陶器の椀・皿が根拠となる。内黒土師器の環・椀の内面は前段階よりもミガキが雑になっている。その次が1号の土器群で、内黒にしない単なる土師器の環や椀の数が増え、ハケメの襷の上半部を口口調整したものが混じっている。内黒土師器の内面のミガキはさらに雑になる。最後に6号出土の土器群がくるわけだが、環の口径と器高が著しく減少しまつたく別の器種に見えるほどで、前3者の土器群とは大きな時間差があることは明瞭だ。これらに概略の実年代を当てはめると、23号、2・22号、1号が9世紀後半から10世紀初頭の約50年間、6号は150年以上後の12世紀の初め頃となり、ここから逆に、石上・薄町遺跡に広がる平安時代の集落は連続と続いたのではなく2つのピークに分かれることが指摘できる。

土器の種類

この時代の土器・陶磁器には土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・青磁・白磁が一般に知られているが、今回の調査では青磁を除くすべてが出土している。しかしその大部分は土師器・須恵器と灰釉陶器で、緑釉陶器は薄町遺跡・石上遺跡を合わせて3片のみ、白磁は同じく合わせて9片が出土しただけで、当地にあつては貴重品だったことがわかる。特に白磁は12世紀代の遺構にもなつて出土した。

土師器

縄文時代からの伝統的な素焼きの土器。最も普遍的に出土する。右の写真は6号住居址出土の11世紀の杯。小形で雑に作られ口クロナデの痕跡が明瞭である。



灰釉陶器

瀬戸美濃で焼かれた陶器で釉薬が美しい。松本には9世紀の終りから盛んに搬入された。写真は石上遺跡の土壌埋納品で、松本市内では最高の逸品。高さ26.4cm。



須恵器

宮寮で焼きあげた青灰色をした硬い土器。土師器と同じように出土するが、時代が下ると壺や甕に限られる。写真は1号出土の長頸壺。内部は空洞のまま出土した。



緑釉陶器

緑色の釉薬を掛けた陶器で畿内や東海地方で焼かれ、当地に運ばれた貴重品。石上遺跡で1点、薄町1区で2点の破片が出土したのみ。左下の写真右列が緑釉陶器でいづれも碗の一部。

白磁

中国からの輸入陶磁器で、当地でも12世紀前半代の遺跡から少量出土する。左下の写真の右列1列を除く9点が白磁で、右下の1点が皿、他は碗の破片である。



白磁と緑釉 白磁上段3点は口縁玉縁のII・IV類。中・下段の碗は口縁側反りのV類と直線的に立ち上がるVI類。緑釉上段は体部中位に袋のある碗。

墨書土器

土器の外面に墨で文字や記号が記してあるもの。奈良時代の後半から平安時代前半に多い。石上遺跡の土壌埋納土器には同じ墨書をもつ土器が3点あつた。



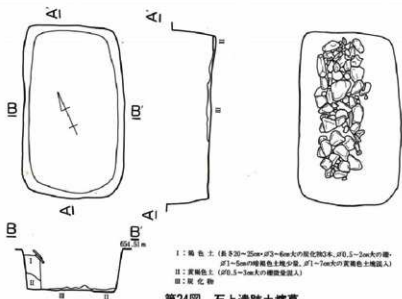
第23図 墨書拡大



石上遺跡土壌埋納出土土器底面の墨書。

木炭を敷いた墓（石上遺跡土墳墓）

調査地西部北寄り、14号住居址の北で発見された。長さ3.6m、幅2.1m、深さ0.9mの長大な墓塚の底面に木炭を敷き、その上に棺を置いたとみられる遺構で、木炭の上面からは棺の形そのままに多数の鉄釘が出土した。また棺の南部外には13枚の内黒土師器の椀と皿、1個の灰釉陶器長頸壺が納めてあった。埋土は下部の胎を除き黄褐色土の大きいブロックを多量に含む褐色土単層でまったく遺物を含まず、明らかに人為的一括埋没されたものとわかる。上部には墓塚の規模よりひとまわり小さい集石を伴っていた。当初、掘り込みをもつ長方形の集石と捉えて測量と掘り下げを始めたが、集石をはずして下げ納けても一向に底面に達せず、やがて一部の釘と土器の露出に至って墓と推定されるという特異な遺構であった。

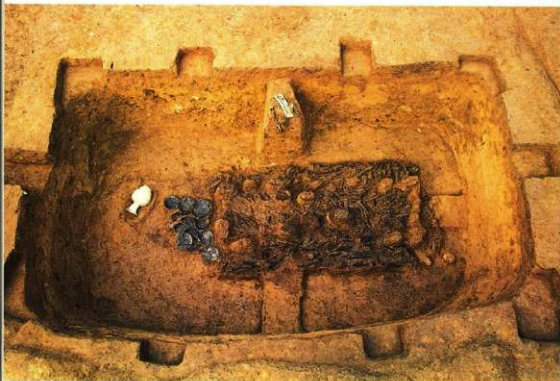


I: 黄 色 土 (長さ30×25cm×高さ3～6cmの筒状物2枚、径0.5～2cmの環状、径1～5cmの黄褐色土塊少量、径1～2cmの黄褐色土塊数点)
II: 黄褐色土 (径0.5～3cmの礫状物多数)
III: 炭化物

第24図 石上遺跡土墳墓

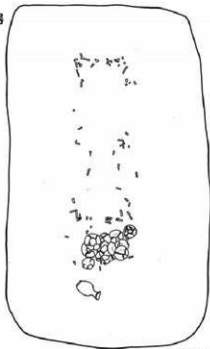


写真左は土墳墓上部にあった集石。当初は土墳の全形が把握できず小さめに掘り始めている。
写真右は土墳墓の調査風景。中で測量をしている女性と比較して特異な大きさを実感していただきたい。



土墳墓の全形と遺物の出土状態。土壇上面の四角に四角く張り出す浅い穴は本址の範囲確認トレンチ。壁はほとんど掘削で、わずかに地山の巖が露出する。向こう側の壁の上部中央に、底面に敷いてあると同じ木炭が2本ほどあるが、なぜなのかわからない。

釘、土器



木炭



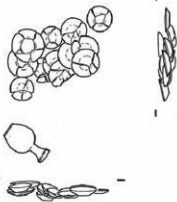
第25図 石上遺跡土墳墓遺物出土状態

出土状態

墓底面の中央やや北寄りに長さ1.8m、幅1.0mの範囲でぎっしりと木炭が敷き詰められ、その上面に接しあるいは数cm浮いて鉄釘が多数存在した。釘の位置をたどると1.7×0.55mの長方形になり、棺の形が浮び上がってきた。棺の位置は木炭敷きのほぼ中央にあたる。棺の釘は少なくとも27本あり、木質が錆に付着しているものも見られた。木炭敷きの南隣には内黒土師器の坏11枚、皿2枚が重なり合って遺存し、割れてはいたがいずれも完形品で、あたかも3つの山に重ねて横んであったのが崩れた状態であった。さらにその南に灰釉陶器の長頸壺が横転していた。坏と皿のまわりには小形の釘が数本あり、これらの土器は木製の箱に入られていたか台に載せられていた可能性が高い。また棺の中央部南寄りに棺の釘よりやや浮いて釘が4本方形配列で出土し、棺の上面に付属品が箱状のものの存在を予測させた。

木炭

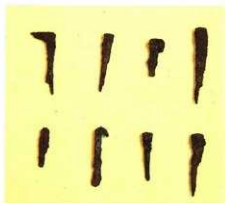
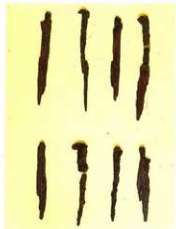
底面の木炭は太さ2~7cm、最長20cmの大きさで、遺構から通常に出土するいわゆる炭化材とは明らかに異なり堅い。今日言うところの「カタズミ」と同じで、窯によって焼成されたものと考えられる。樹種はすべてコナラ。



土器出土拡大



木炭の範囲のやや内側に掘り残した低い土柱の上に釘がある。土器には破損の程度が著しいものとヒビが入る程度のものの差がある。

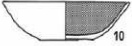
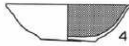
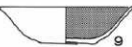
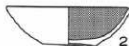


棺と箱の釘 (写真上段)

写真左から3枚は棺の釘の残存の良好なもの。最長は12.3cmを測る。右から2枚目は釘の錆に取り込まれて木質が残っている状況を示す。木目の方向から釘が板に直行するように打ち込まれていたことがわかる。写真右端は土器の周囲から発見された釘。棺の釘より小さく、土器を納めた箱状のものに使われていたと推定される。

納められた土器 (写真左、実測図)

内黒土師器の杯と皿が13点、灰釉陶器の壺が1点。杯と皿は厚みや微妙な作りまで似通い、特注で同時制作された可能性を感じる。実測図11は木炭敷きに混じっていた軟質須恵器の杯破片。墨書がある。



第26図 石上遺跡土槨墓出土土器

墓の復元

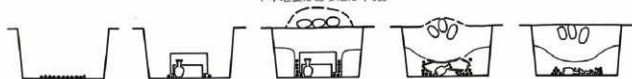
墓塚(墓穴)を掘り底面に木炭を敷く。

棺と土器の箱、壺を置く。

棺のまわりにも木炭を詰めて埋める。上面に礫を集める。土マンジュウや卒塔婆があったか不明。

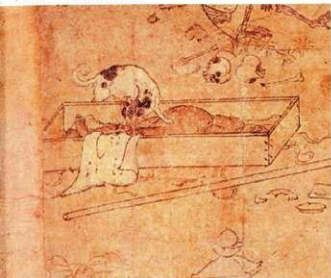
棺が腐り始めて上即が陥没。土器が倒れる。

遺骸や木質は完全に腐朽して遺物のみが残る。



第27図 墓の構築から崩壊まで

平安時代の墓や棺の様子



左の図は棺と遺体である。担いできた棒と土器が描かれているが、棺の蓋は見当たらない。しかも棺は浅い。棺の釘も斜めに貼り合わせて交互に打ち込んでいる。右図は土冨頭と積み石の塚でいづれも卒塔婆が建つ。本例もこのようなものだったのだろうか。図の出典は観兜草紙(12世紀後半から13世紀初頭成立)。

埋葬状況の復元

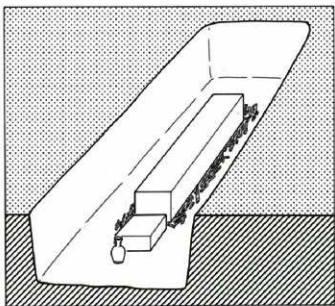
遺物の出土状態から以下のことが予測できる。

- ①木製の棺があり、釘を打って組み立てられていた。
- ②木炭を敷いてから棺を置いた。
- ③杯と皿は木製の容器状のものに入っていた。

これらから埋葬状況を推定復元したのが右図である。ただし壺が立ててあったか最初から転んでいたか、棺や容器に蓋があったか、また棺の構造などは正確に復元できない。布や紙などの埋納品も不明である。

県下最大の平安時代土塚墓

墓塚の規模は上面で3.6×2.1m、底面で3.4×1.8mを測り、深さは検出面から0.9mであるから、構築当時は1.2m位はあったのだろう。この規模は長野県内発見の同種の遺構のなかでは他の追随を許さない異様な大きさである。釘の遺存による棺の存在の証明と大きさの復元できる例も初めてで、木炭敷きも珍しい。土器に容器が半うことも寡聞である。このように本址は規模、内容ともに県下屈指の該期土塚墓といえよう。惜しいのは遺物の量と質で、この点では普通の水準にある。



第28図 埋葬の復元推定

中・近世の遺構と遺物

概要

遺構では土坑と火葬墓、竪状の集石が発見された。2基の火葬墓が石上遺跡にあつたほかは、すべて薄町遺跡2区に集中する。薄町遺跡における中・近世の遺構の広がり、この2区周辺を東限として、西方の現在の薄町集落の下に延びていくためであろう。すなわち近世については現集落に連続していくものと理解してよいと考えられる。薄町2区の遺構分布は、3カ所ほどに大小の土坑がまとまって切り合いが著しく、それらの間には遺構がないという状況であった。遺物は遺構内や検出面から少量が出土したが、特にまとまって遺構に属するという状態の出土はなく、帰属性は厳密に問えない。またこの時期の遺構に破壊される平安時代の住居址が若干あり、その遺物も各所に混入していた。



竪面 束剣からみたところ。特に手前の辺と左下隅で竪の有無の境界が明瞭である。



薄町遺跡2区中央部土坑群 大小さまざまな土坑が切り合っている。径20cmほどの竪がだいたい覆土に含まれ、大形の土坑の中には一隅に竪がまとまるものもある。

竪面

薄町2区の北端西側に検出された竪の集まりで、範囲は東西9~12m、南北14mに及び、北部の調査地外に続く。竪は径5~20cmの垂円形で、中央部から西で現代の耕作のためが帯状に抜ける部分があるが他は一樣にびつりと詰まっている。境界の線は明瞭で、特に東辺から南辺の東半にかけてはっきりしている。調査地内での平面形は大きな正方形か台形に見え、建物の基礎の下部の構造ではないかと推測している。竪の厚さは1~2段と薄く、竪中や上面から近世の古銭や金属製品が出土した。

土坑

薄町2区で60基検出された。規模はさまざまで大きいものは3m近くある。平面形は各種あるが、不整形な隅丸長方形と楕円が主流となる。深さも変化に富み、最深で約1mを測る。遺物は陶磁器や鉄器が少量含まれていたのみで、しかもその土坑の時期を示すものかどうかは確実ではない。従って細かい時期比定は困難である。

遺物

土師質土器・青磁・中近世陶器などの土器・陶磁器、釘などの鉄器・鉄製品、石白などの石製品、キセルの雁首・吸い口などの銅製品、渡来銭・寛永通宝などの銭貨が出土した。

銭貨

薄町遺跡2区から27枚、石上遺跡から3枚の計30枚が出土した。寛永通宝4枚以外は渡来銭で、開元通宝3枚(唐)、洪武通宝1枚(明)の他は宋銭である。出土地点は土坑と火葬墓内が僅かにあるが、大半が検出面からで、堅穴住居址(平安時代中期)出土品は明らかに混入したものだ。寛永通宝が近世(江戸時代)、その他が中世の遺構に伴っていたものと推定される。

松本市内では銭貨は中近世の遺構が検出された遺跡から頻繁に出土する。向畑遺跡37枚(中世墓)、南栗遺跡66枚(中・近世墓)、秋葉原遺跡74枚(近世墓)、石行遺跡82枚(同)などが主な事例である。



薄町・石上遺跡出土銭貨一覧表

No	出土地点	名称	径(mm)	重量(g)	初鋳造年	備考	No	出土地点	名称	径(mm)	重量(g)	初鋳造年	備考
1	薄町 49住	開元通宝	23.0	2.46	621		16	薄町 検出面	開元通宝	23.7	3.15	621	
2	薄町 50住	寛永通宝	25.2	2.32	1636		17	薄町 検出面	寛永通宝	22.7	1.95	1636	
3	薄町 50住	寛永通宝	23.7	2.81	1636		18	薄町 検出面	元祐通宝	23.9	2.72	1086	同線欠
4	薄町 218土	天禧通宝	24.2	2.06	1017		19	薄町 検出面		22.4	2.20		歪む
5	薄町 237土	開元通宝	23.1	2.84	621		20	薄町 検出面	〇〇〇宝	23.1	1.91		
6	薄町 241土	天禧通宝	25.3	2.75	1017		21	薄町 検出面	天禧通宝	23.7	2.84	1017	同線欠
7	薄町 検出面	寛永通宝	25.1	2.91	1636		22	薄町 検出面	天聖元宝	24.6	2.92	1023	同線欠
8	薄町 検出面		(23.2)	(1.44)		同線欠	23	薄町 検出面	天聖元宝	(19.7)	(1.04)	1023	1/4 欠
9	薄町 検出面	政和通宝	24.3	3.49	1111		24	薄町 検出面	〇〇元宝	(22.8)	(0.99)		1/2 欠
10	薄町 検出面	天聖元宝	23.7	1.58	1023		25	薄町 検出面	洪武通宝	23.2	2.75	1368	
11	薄町 検出面	崇寧元宝	24.2	(1.98)	1068	同線欠	26	薄町 検出面	景德元宝	24.4	2.70	1004	
12	薄町 検出面	景德元宝	23.4	3.07	1004	13と付着	27	石上火葬墓2		10.8	1.27		同線欠
13	薄町 検出面	紹聖元宝	24.7	3.37	1084		28	石上火葬墓2	崇寧元宝	23.2	2.53	1068	
14	薄町 検出面	開元通宝	24.6	1.83	621		29	石上火葬墓2	元祐通宝	24.4	2.91	1086	
15	薄町 検出面	〇元通宝	24.2	2.31		1/8欠	30	石上 検出面	聖宋元宝	24.4	3.28	1101	



本遺跡より約600m西の針家古墳で写真程度のクレーン上から望む。右手の森は薄の宮。

調査のまとめ

縄文時代

石上遺跡において前期末から中期初頭の小規模な集落址を確認することができた。この時期の遺構は松本市白神遺跡や岡谷市大沼遺跡で発見されているが、いずれも数軒の住居と土坑から成る小規模なもので調査前は該期遺構の存在を予測し得ない程度であり、本例もまったく同じといつてよいであろう。ただし薄川の低い段丘上という平坦地であることは注目されよう。

弥生時代

鎌田遺跡1区において後期後半に属すると考えられる竪穴住居址を2軒確認した。12頁で述べたように市内では少ない時期の資料だけに貴重である。また中期後半から後期にかけて生活圏が拡散していくことも窺えた。

古墳時代

鎌田1・2区で各1軒の中期の竪穴住居址を発見したが、2区の2号は焼失住居で良好の土器群を出土した。これまで資料が僅少であった時期なので貴重である。また従来は、この時期の遺構自体が少なかったため、今回の発見は今後の山辺地区各地の調査の進展によって5世紀代集落址の空白が埋まることを十分に期待させるものであったといえる。

石上遺跡で発見された後期古墳の周溝は、この薄川流域にいままで知られていたより多くの古墳が築造されていたことを暗示する発見であった。しかも既に平安時代には墳丘は破壊され、煙滅していたという事実も驚きである。1000年来の地域開発の歴史の中で消えていった古墳の数は私達の想像を超えるのかもしれない。その一方で現在まで残った古墳はいかに幸運で

あったかということとも、やはり何らかの取捨選択が住時からあったのではないかと考えてしまう。

平安時代

各時代のなかで最も多くの竪穴住居址が発見されたが、土器の分析から、実際はひとつの大きなムラではなく、9世紀から10世紀にかけてと12世紀初頭のふたつの時期の集落が重なっていたことがわかった。松本市内では平安時代は各地に遺跡が広がり、たいていの発掘調査で遭遇するが、どういつか11世紀以降になると住居址が散見されるだけで、まとまって確認される例が非常に少ない。いままでの調査が該期の孤立的な集落にあたっていないためと理解されているが、今回調査はその一部に触れたものとして、また、山辺地区には広範にこの時期が分布するのではないかという予測を持たせるものであったと評価できる。

石上遺跡発見の土壌墓は今回調査の最大の成果であった。規模・施設ともに県内屈指の内容であり、特に多数の釘の遺存から棺の存在が直接的に証明されたことはきわめて重要である。近年、松本市内でもこの種の土壌墓がいくつか発見され始めており（三間沢川左岸2例、平畑3例、小池1例）、今後さらに研究が進む遺構であろう。

発掘調査全般について

隣接する3遺跡を5地区に分けて発掘調査を実施したわけだが、調査地の選定はその一帯の数ハクトールに多数の試掘溝を掘って遺構分布の密度によって行った。従って調査地区外でも遺構が存在する部分も少なからずあったと考えるが、そこについては奈何ともし難かった。大規模調査における重要な課題であろう。

薄町・石上・鎌田遺跡発掘調査参加者一覧

調査団長：松村好雄（松本市教育長） 調査担当者：眞井雅尚（社会教育課主事） 調査員：太田守夫
協力者：青柳洋子 赤羽育代 赤羽苞子 赤羽真人 赤羽紀子 浅輪敬二 新井まき子 五十嵐周子 石合英子
石合佐千子 石川末四郎 伊丹早苗 伊藤留子 因幡美津子 内沢紀代子 内田和子 近野洋子 遠藤愛子
大出六郎 太田千尋 大谷成基 大塚袈裟六 大沼健一郎 岡部登喜子 小幡芳久 開崎八重子 上条尚美
川窪金子 神沢ひとみ 北沢達二 久根下三枝子 小池直人 小岩井美代子 興定夫 後藤みさを 小松正子
佐々木保二 下里順子 湖川長広 袖山勝美 高山柳子 瀧澤隆男 滝沢直美 滝沢鷹一 武井栞子 武井弘子
武田睦恵 竹村栄美 竹村初子 竹村春代 田中加干枝 塚原晴美 鶴川登 永沢周子 中島新嗣 中村恵子
中村嵩 中村文一 西沢敬雄 西沢了子 西村好 野村愛子 中崎助治 林昭雄 平林薫 福島孝行 藤本嘉平
二本茂雄 降旗大太郎 牧久雄 松尾さだ子 松原嘉代子 三沢元太郎 宮坂紀子 豊恵以子 百瀬清子
百瀬久美子 山本裕子 横川博子 横山恒雄 吉沢克彦 吉田勝 米山明子
事務局：松本市教育委員会社会教育課



石上遺跡調査地 中央部を北東方向から望む。遺跡のかなたに見える集落は薄川を渡った南方地区。



石上遺跡古墳周溝 紙数の関係で図示できなかったが、一帯には多数の古墳があったことを窺わせる。中央は平安の住居。



薄町1遺跡区全景 西から望む。四角く細切れに段差がついている部分は溝を検出した跡。



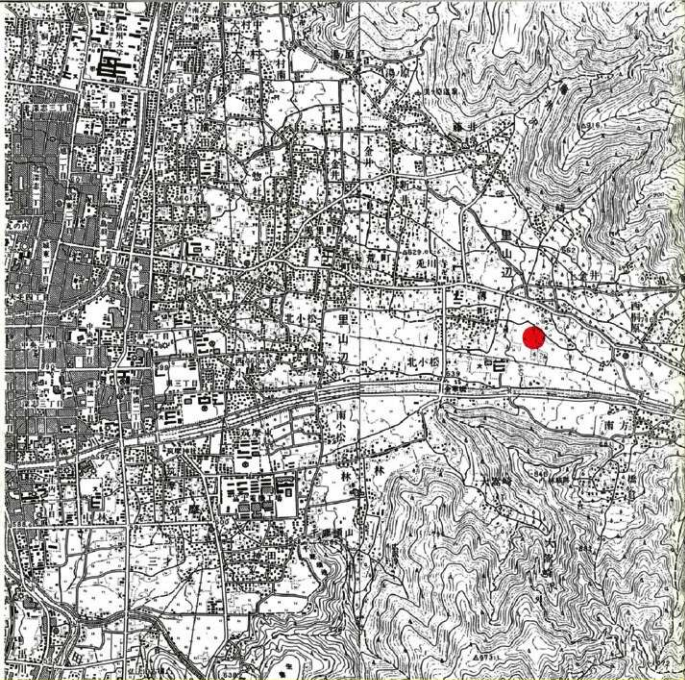
薄町遺跡2区全景 東から望む。中央奥の一本木は古宮古墳の跡。しかし付近から周溝の検出はなかった。



鎌田遺跡1区全景 北西からみたところ。細い縦横の溝はサブトレンチ。中央右側は4号住居。



鎌田遺跡2区全景 南東から望む。手前左側はトレンチを入れて遺構検出を試みた跡。中央左奥が2号住居。



1 : 25,000



松本市里山辺
薄町・石上・鎌田遺跡

県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査概報

平成3年3月30日発行

発行 松本市教育委員会
〒390 長野県松本市丸の内3-7

印刷 株式会社 綜合印刷